

研究・イノベーション学会 第40回年次学術大会企画セッション
「学術書のオープンアクセスについて考える」
2025年11月6日(木)
オンライン

なぜ日本の学術書のオープンアクセスは 進んでいないのか？

天野絵里子



京都大学



自己紹介

天野絵里子

京都大学 総合研究推進本部 企画部門

- リサーチ・アドミニストレーター(URA)(2014-現在)
- 元・図書館職員(1998-2014)
- 博士(技術経営)(2015)、MBA (同志社大学)

URA

研究支援・
オープンサイエンス

×

ライブラリアン

オープンアクセス
出版

背景と問題提起

URA、図書館員として見えてきたこと

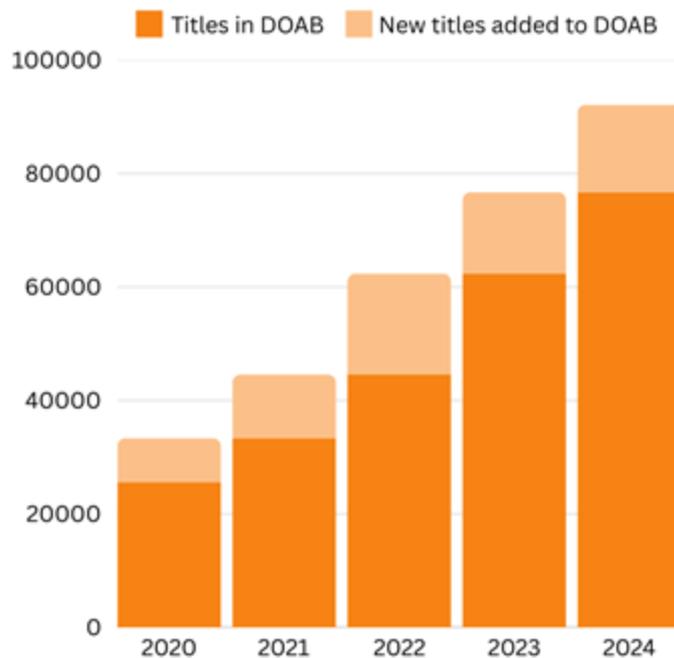
- 研究成果発信・・・オープンアクセスが効果的で魅力的な手段
- 雑誌論文ではOA化が加速している一方で、学術書のOA化は進んでいない
- 特に日本語による学術書では、出版エコシステムそのものが障壁となり、OA化への道筋がない

問題提起

- 日本の優れた研究成果が、国際的に流通する機会を失っているのでは？

欧米の現況と事例

統計



2020年から2024年の5年間にDirectory of Open Access Books (DOAB)へ収録されているタイトル数

ビジネスモデル

Book processing charge (BPC) / OA料金	著者が、通常は研究助成機関や所属機関の助成を受け、出版社にBPCやOA料金を支払う。
フリーミアム	他のフォーマットの電子版や印刷版の販売、および/または図書館が支払う会費などの収入源によって補助されるため、著者の費用負担なくOAとなる。
図書館メンバーシップ制	図書館やその他の機関が出版社に年会費を支払うことで、書籍のOA化にかかる費用の一部を負担するモデル。会員機関および/または著者は、BPCの割引などの追加特典を受けることができる。
図書館コンソーシアム (機関クラウドファンディング)	OAではない書籍のコレクションに対し、図書館がOA化のために参加費を支払うと約束し、十分な数の図書館の参加が確認され、目標金額が達成されるとそのコレクションがOAとなる。

Subscribe to Open	図書館がクローズドアクセスの特定の電子書籍コレクションを購読または購入し、その購読料が新しく出版される書籍のOAに充てられるモデル。
クラウドファンディング	個人が費用を拠出し、十分な数の個人の参加が確認され、目標金額が達成されるとその書籍はOAとなる。
機関助成 / New University Presses (NUP) (新しい大学の出版局)	研究機関がその機関に関連するOA出版局での出版を助成するモデル。料金は請求しないか割引され、その機関に所属する研究者はさらに割引や料金免除を受けることができる。

天野 絵里子, 設楽 成実, 学術書籍の流通の現在: オープンアクセスを中心として, 情報の科学と技術, 2025, 75 巻, 6 号, p. 260-264, <https://doi.org/10.18919/jiq.75.6.260> より

原典 <https://oabooks-toolkit.org/business-models-and-funding/business-models/article/10432084-business-models-for-open-access-book-publishing>

New University Presses (新しい大学出版会)



UCL Press

- UK初の完全Open Access大学出版会 (2015年設立)
- Paywallという障壁のため数百部しか売れない→誰でもが読めるように
- これまで学術書 400点、教科書 11点、学術ジャーナル 15誌 を出版
- 242の国・地域から2千万ダウンロード
- UCLの著者だけでなく、世界中の独立した研究者や他の学術機関の著者も積極的に受け入れる = 国際的貢献
- 収入源: 大学、印刷版(ペーパーバックなど)の販売、助成金、コンサルティング・サービス
- UK政府もNUPを後押し([Toolkit](#) = 出版局立ち上げマニュアルを公開)

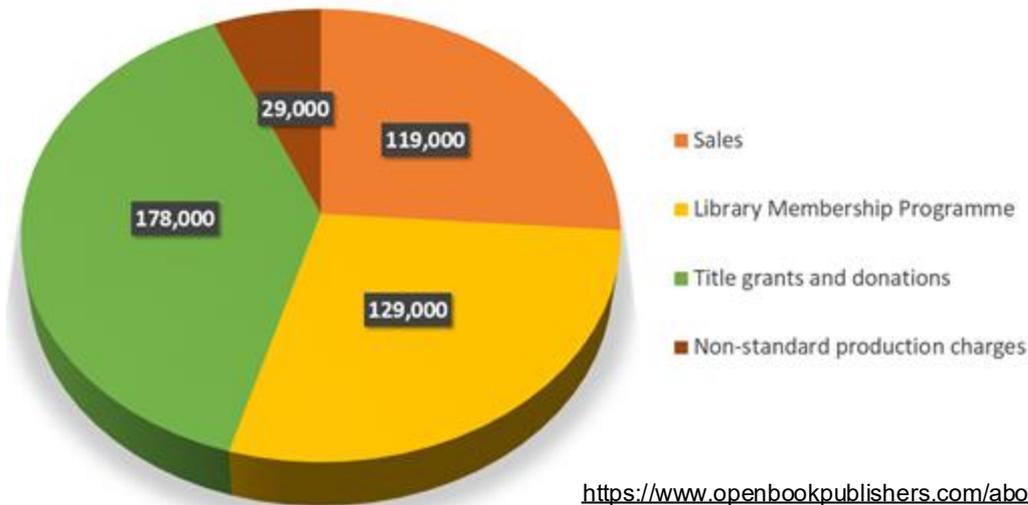
フリーミアム／研究者主導



Open Book Publishers

- 2008年にイギリスのケンブリッジ大学の研究者によって創設
- Scholar-led(研究者主導)
- “知識はすべての人に無料で提供されるべき。そのためにOAは最良の方法”
- “従来のレガシー出版よりも財政的に効率的であり、より包括的”

OBP revenue 2023-2024 (GBP)



日本の事例



図書出版
文学通信 repository

多様な情報をつなげ、多くの「問い」を世に生み出す出版社
〒114-0001 東京都北区東十条1-18-1 東十条ビル1-101 電話03-5939-9027 FAX03-5939-9094 info@bungaku-report.com

文学通信公式サイトはこちら

Twitter Facebook Instagram YouTube

WEKO

検索

言語: 日本語

アイテムリスト: 1 - 21 of 21 items

インデックスリンク: インデックスを選択してください

インデックスツリー: 古文書の科学, 未来を切り拓く古典教材, 文学通信出版目録, 略歴・著作目録, 地域歴史文化継承ガイドブック, 歴史情報学の教科書

アイテム: 『デジタル学術空間の作り方』 仏教学から提超する次世代人文学のモデル 扉・目次, 2019-12-18, pdf, prologue 情報通信革命と人文学の課題 (下田正弘), 下田正弘

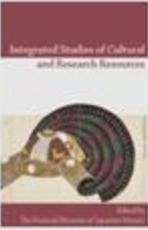
新着情報

最新 100件	検索
シンポジウム どうする? 「国語」の探究型学習—高校の—	05/16 11:41
『古文書の科学 料紙を複眼的に分析する』全文PDF/ epub	02/11 01:07
第2部 教材編 初級 『竹取物語』をくずして学んでみよう! はじめに—これからの古典教育のためは	02/11 01:06
執筆者・協力者一覧	03/28 13:02
用語集	03/28 13:01
おわり	03/28 12:59
第4部 料紙研究を広げる COLUMN 紙資料の「デー...	03/28 12:58
第4部 料紙研究を広げる 3 世界へひらく、つなぐ	03/28 12:56
第4部 料紙研究を広げる 2 史料の形態データと内容デ...	03/28 12:55
第4部 料紙研究を広げる 1 データを記録・保存する	03/28 12:51

国立歴史民俗博物館 × Fulcrum (ミシガン大学出版局)

NATIONAL MUSEUM OF JAPANESE HISTORY Search works

Home / Integrated Studies of Cultural and Research Resources



Integrated Studies of Cultural and Research Resources

The National Museum of Japanese History
Ayako Shibutani, Junko Uchida, Makoto Goto, Masashi Amano, Norio Togiya, Takayuki Ako, Tsutomu Saito, Yoshihiro Okada, Wei Shi, Kosuke Kaneko, and Yuta Hashimoto

2019

OPEN ACCESS

The ISCR project approaches Japanese historical resources from the perspective of interdisciplinary studies in the humanities and sciences using information infrastructure. It mainly aims to advance the state of research on historical studies in Japan. By classifying various cultural and research materials into time periods, regions, and research fields, analysis with an interdisciplinary scope can lead to more advanced sharing infrastructure and additional cooperative studies. To apply ... More >>

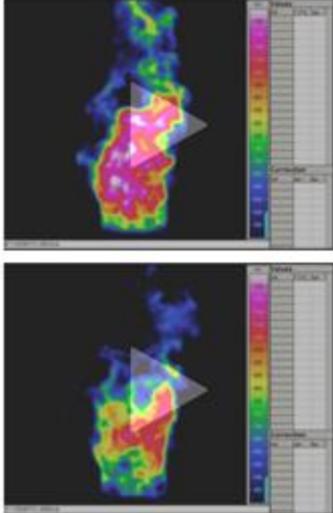
Read Book

Subject History: Asia: Japan
Education: Teaching Methods & Materials: Arts & Humanities

Citable Link <https://hdl.handle.net/2027/fulcrum.zc7>

Integrated Studies of Cultural Research Resources

RESOURCES Get Citation Search in this text...



く、水船あるいはゼリー状の挙動を示していることから半熔融状態にあるものとみられる。噴鉄のままであればこの程度の温度では溶解に至らないので、これは、原料の軟鉄が炉の上層部で木炭と混合され、還元雰囲気下で加熱されることにより、固体の軟鉄に対する炭素の侵入が表面から起こって融点が下がり、半熔融状態となって流れていったと推測される。揮発物の残りまで下部温度が測定できたことから、生成物は火床からの風がある箇所には留まらず、さらに下層部へと速やかに移動したものとみられる。実際、揮発後に確認したところ、生成物は羽口からの風が十分に届かない炉底部にできていた。また、揮発が失敗した場合に起こる現象としては、全体として温度が低めで、原料片の一部が未反応で原型をとどめたまま炉底に集まっているという状態がみられる。

一方、製炭では、液状化した鉄が少しずつボタボタと垂れ落ちていくのが観察された。これについては、浸炭の際の炉内雰囲気と比較しても、明らかに流動性の高い様子が見られた。鉄鉄の融点は比較的高いので、原料が少しずつ熔けて液体状態になっていったのであろう。揮発の途中からステンレスパイプの先がふさがって下部温度が測定できなくなってしまうことから、生成物は早く凝固された炉底部に溜まっていたことがわかる。揮発後の確認でも、生成物は炉底の、羽口の風を受ける箇所にてできていた。揮発が失敗した場合に起こる現象としては、全体として温度が高めになってしまった結果、原料が急速に熔けて大量の流鉄が炉底部にいつべんに溜まり、内層まで浸炭が進行しないという状態がみられる。

4.2 反応機構の推定

以上から推測されるそれぞれの炉内反応の模式図を図5に掲げた。詳細は下記の通りである。

まず、浸炭の場合（図5a）、原料の軟鉄は炉の上層部において、高温下で表面から浸炭し、半熔融状態となって下に落ちていく。これを達成するため、送風量は多く、炉内

考察

日本の学術書出版の特徴

出版構造

- 一般書と学術書の区別が曖昧
 - 書籍全般の価格が(欧米と比較して)安い
 - 研究図書館や研究者だけでなく、一般の人も学術書を購入する
- 読者が対価を支払うモデル

- 著者である研究者が獲得する研究費、出版助成金を原資として出版される
- 補助金(多くは公的資金)で賄うモデル

研究評価

- 書籍の出版が研究者のキャリアアップにつながる
- 編集を経て出版されることで、書籍の内容の保証になる(対して欧米では査読がある)

マインドセット

- 研究者・出版社に紙の本への愛着がある？
- デジタル化への懸念がある
 - ”OAにすると軽く見られるのではないか”
 - ”電子版では読んだことにならないのでは”

OAが入り込む隙がないエコシステム・・・

今日の議論に向けて

現状の学術書出版のエコシステムがうまくいっているのか？

このままでは日本の優れた研究成果が読まれなくなるのでは？

世界からますます見えにくくなるのでは？

} 危機感を共有

そうは言っても、エコシステムをがらりと変えるのは難しい・・・

日本で学術書をOAで出版するという『選択肢』を増やすには、何が必要か？

- 政策・・・OA義務化を書籍にも？
- 大学・・・大学出版／図書館出版の開始？
- 研究者・・・OAを機会ととらえてマインドセットを変化させる？
- 出版社・・・？？？